

てハレンシーンの縁飾を二萬二千フラングは賣付けんと
せり然ども使節手許モトは一金も所持せざりし人甚と其
譯官を笑へり其譯官中の最も巧者ある立廣作すらニス
トレプレニポテンテアレと云語をニスタロンプレニポ
デンチアロンと通弁しとりと

佛蘭西人を外は心配するところあるも拘をらず今他の萬事
を隠し置く日本使節と共に歡樂を極め佛國より出る新聞
中は多く此亞細亞人日本を云ふの事を載せ而も實は善き事の
み記載せり其故を此新聞よる佛國內地の事件を説かず且
近時少く心配の事件あるも記載する程の事なきを以て

かり

佛國內地の制度及びトウロウセの僧正の令命は就ても余
之を説くを要せず又外國の事件の如きを尚之を説くす是
を以て新聞も只モニテウル會社之を説く時方は纔は世人
之を聞くを得べしとす又プロセスレ會社も新聞を出さ
ざるは因て世上は益をふすを少く是以て日本使節を今日
リオンは逗留せり其使節の名を笑はずして言ひ出し得る
者なく既に其長きむらりよても衆人の慰とふれり使節曾
てマルセイユレよて鐵道よ上らんとする頃其從者の内大
危篤あるを唱る者あり是は因て其掛りの者之を送るよ

甚しく心勞りたり使節等既に蘇士の鐵道を旅して來る
ふれど此度蒸氣車に乗ると初めて非ず然るは此の如き
説起るも頗る解し難しとす使節を容貌正しきとあり然も
も事情を解すると甚ど妙あり但し其内をも嫌忌すべき人
も之あり

二人の日本少年一人を十三歳より一人を十六歳おぼり
善く佛英二國の語に達しされど之を以て其通辨官とふ
り

人の通知せる如く日本使節を旅館をロウフレに投宿して
此の程能く暮せるとを我聞けり彼肉食中にてを煮る鳥

を最好むと見へたり總て食物をも何よても胡椒を夥しく
振つけ食するに臨んで小刀及び肉叉子を用いたり又衣服
及び其他の品物も極めて清潔よし且其日本人を頻り見
んを好みて絶へず來れる者を全く妨ぐるとあり

予が尚此の記して告知すべきも使節今晚ロトマゴの練馬
場にて演劇を見物し又明後日も政事役所の公會を見物
すべきとあり但しボウルボン宮の廊廡にも悪言をなす者
あり此公會をモルニイ氏故に設くる所より日本使節は
佛蘭西政議の模様と紳士の鈕釦を付けたる外套を服せる
状を見せしめんが爲かりと云

海外新聞別集 九月印刷

原本ロテルダム新聞紙第十二號二千八百六十二年六月

或五月二十六日あり

○日本使節ロテルダムに到着せし事

第六月十四日我五月十七日の早朝より船手仲間の會所より近き上陸場より千萬の人群集りて此頃の天氣惡き故日本人兼て取極めたる時刻は倫敦英吉利の大都會より此處に來る哉否哉杯と噂しつゝ其使りを待居たり○然るに此日本人の乗りたるアル左ノといへる船にハルンフリーストスロイスといふ湊を見ゆる趣役方の傳信機よて知らせありたり○此噂早速よ

鹿特堤の市中は弘まりゝるを日本人此湊より獅子と名付
たる役方の蒸氣小船は乗り移りオール子といふ運河を通
りて晝頃より此所へ来るからんと推察せり。○此故は珎しき
日本人を見んとて諸方より集り来る者多く維廉堤維廉堤マース
町等其外其近邊も人込み甚しく後れ来る者も此邊は近寄
る事能むさる故日本人の通るべき道筋は群集して日本人
の鐵道の驛場は行くよ大に妨げとあらんと見へたり
川の上り口の登登は毛氈及び幟木綿等にて飾りたる橋を掛
けて日本使節の上陸を仕易くおしり。○此上陸場より市
中の兩側は生立たる草花を植列ね其中間も彩りたる竿を

二行は立列ね此竿の上は和蘭想國の幟オラニ一の幟鹿特
堤の幟及び日本の幟を翻しり。○此日本の幟は白地に朱
を以て日の丸を染めたる者にて以前ヨングヘールカテン
デーケの日本は在留せし頃此人より日本の役所より云ひ出
し日本帝王ニカの幟印と差別して日本總國の幟印とせし
者あり。○偕此兩側は立たる幟の間の道を日本人の入るべ
き館舎より到るまで毛氈を布き並へたり。○加之堤の近邊又
も川中等はも夥しき旗幟を飾り立たる三本帆の大船又も
蒸氣船あり或は諸所近邊を漕ぎ廻る小船あり又街上はも
千萬の人群集して少の隙地もかく家々の軒下はも數多

の士女等集りて實アリサマに其形勢目を驚す許りかりき

第十時半の頃第四歩兵レヂメント隊の第四バタイロン隊
ゴウダより維廉堤ウイリアムより來りて日本人の入るべき船手仲間の
會所の左側を警衛し又其右側を都府の兵士堅固に警固せ
り○其後暫ありて饗應掛りの役人口ウドンといふ人政事
書付預役パイシーレスと共に同様の出立よて都府年寄役
の案内よて兼て日本人を招待する處と定め置きよる赤書
院を通りより○此赤書院も此館舎の門戸の通りよ頗立派
よ飾り付けより○此赤書院よ國王の書像の下よ紅の花
形を彫りよる歩障ツイタテを立て其向側よ和蘭と日本の幟を立て

より又此書院の右の端よ和蘭の幟を立て飾り左の端よ
も日本使節三人の紋付けよる三本の幟を立て飾りて其美
麗言語よも述べよとくして此赤書院も實に花堂とも疑もる
許りかりき○此幟も三本共よ地チを天藍色よて白き紋を付
けより第一番の使節竹内下野守といへる人の紋も周圍マハリよ
林檎の如き者五ツ星の形をふし今一の星も其真中よあり
て其側よ笏シヤクの如き者あり第二番の使節松平石見守といへ
る人の紋も大なる木葉三枚列りて其頭よ芽あり又第三番
の使節京極能登守といふ人の紋も四ツの菱を四角よ組よ
る者あり○又其側よ日本字よて左の書く如き付よる幟を

立より

和蘭人日本尊客の為に謹て立之候

又此赤書院の隅に和蘭交易所の幟を飾り立て其外其書院中よある諸具を或は紅色或は白色或は青色等にて其美麗云をん方どおくりけり

諸饗應の役人も暫く此赤書院に日本人の來るを待受けて居たりし俄に千萬の人騒ぎ立て日本人の來りたる蒸氣小船已に着岸せしといふ噂頻りおくりけれを饗應の役人も直様出て見しに日本人甲板の上を彼方此方と歩行き廻り

殊に其内の一人直に筆墨等を取り出して何角寫し取る様子ありし後其者の英吉利語にて巧みは話すを聞けし此處にて日本使節を招待する設けの丁寧美麗なる模様を寫し取りたるよし○此處にて使節始總勢皆暫時上陸の用意を整へたる後和蘭國王の命にて英吉利迄迎へ行きたる饗應掛り役人の案内につれて直に上陸せり此時和蘭の樂人組を歌を謡ひ音樂をふして其上陸を祝ひたり○日本人此上陸場より館舎に到る迄の模様を實に珍しき形勢にて茶色顔の日本人形を小男にて青鼠の上衣を着し數種の彩色にて草花を付けたる野袴を服し白足袋をき茶色の草履

を用ひ大ふる藁笠を被り奇麗なる大小を帯ひて皆一同よ歩兵の行装ふて出立とる模様も實よ奇妙なる形勢ありきアリサマ其後使節も都府年寄役の案内よて其從者を引連れて書院の内よ通り書院の真中よ待居とる饗應掛り役人の前よ來りて腰を屈め笠を左の手よ取りて挨拶をかゝ其後其從者も皆笠を脱き腰を屈めて役人よ挨拶をかゝとり○偕一同其座よ付て後口ウト前よ云へる饗應掛り役人といふ人日本使節よ口上を述へホフマンといふ人を此口上を日本語よ和解して使節よ傳とり○其口上よも日本使節の今度和蘭國よ來りとるとの忝き旨を申述へ和蘭と日本とも余國とも違ひ

舊來の好みもある事かれを實よ信友ともいふべき趣を述へ且右様の譯柄もある事かれを今度始ての渡來を彌交りを厚くするよ甚宜しうよべき旨をも申述へとり○第一番の使節此口上の趣を篤と聞て直様其返答をかゝ和蘭の日本通詞此返答を和蘭語よ和解して饗應掛りの役人よ傳へとり偕其口上よも今度使節渡來よ就て和蘭よて深切物取扱も使節始總體の者殊よ忝き事よ存し就ても日本と和蘭の好みも二百年來のよかれを決して和蘭の事も余國同様よも存し申さゝる旨を申述とり

諸人此使節の返答を聞て兼ての噂とも大よ相違して日本

人を決して頑固よりとまりて安し外國人をいやむる等の事おく其口上も取廻をし等も實は丁寧は行届き理非も善惡も能く辨し居る者といふとを始て承知せり○殊は使節三人の饗應掛り役人は應接せし模様並都府年寄役は深切なる應對をふしとる模様も實は日本の能く開とる證據の第一ありき○其後直様日本書記方の一人筆墨を以て立ち和蘭人に向て聊う恐るゝ氣色もおく此書院の飾り立の模様歸着の上委細日本大君將軍家へ申上度候間一々承知致度旨を申述て此飾立の寫取りは取掛りたり○此一人の者此書院は誥合せとる諸役人の役名を承知致し且其壁際

は掛りたる畫像も何人の像あるや承知致し度旨をも懇望しとる○其側は居とる人委敷其返答を爲して彼是の事を委細は話しとる○其後彼一人其側の人に向て我等此所は來りて數多の美麗ある貴女子を見とる事を決して忘さる様記録し置くへいと云ふとる

諸其後日本人に向て暫時休息してを如何哉と尋ねて日本人の常は好める茶菓子其外煙草道具等を出して頗る懇切の取持を爲しとる○但し使節始總體旅行の勞れよて早く

海牙 和蘭の都 よて 到りて 休息し とる 模様 ある を見 取り

し故兼て用意し置きとる乗車を與へて之は乘らせたり○

第一番の乗車も日本の使節三人並先年日本にありて交易奉行の役を勤めたるドンクルモルビスに乗り第二番の乗車も以前日本に行て其土人と交りたる人よて當時海軍甲比丹を勤むるペルスレーケンに乗り第三番の乗車もホルマンと云へる學頭第四番の車も屬國掛りの大役人ミルデンと云へる人乗り又日本使節に従ふたる大役人を四五人づゝ分れくよ此四の車も乗り其外の日本人又を和蘭人も此余の車も乗りたり

凡第一時頃に使節の車鐵道の問屋場に到りし其所の役人等大に此來着を祝したり其外此鹿特堤の道筋もて此道筋の支配役等皆其來着を祝したり

暫くありて最早蒸氣車を出さんと思ひしよ平日通行の蒸氣車第十二時半過し通るよしを聞て暫時待合せしり偕其待合せの間使節三人を第一番の番部屋に入りて其所にある丸き卓子に向て場所取り其外の大勢の人を壁際に場取り其外残りの者を第二番の番部屋に入りて坐したり

此土地の士女等日本人を見んとて此所に來りしよ此問屋場の支配役人等少しも制することなく此内に入りて日本人を見る事を許せし故に千萬人の士女殊に第二番の番部屋に入り來りて或も日本人と名札を取遣りすることもあり或も

手真似をかいて話をするもあり或は和蘭語並吉利語等を
知りたる日本人を頻り其語を用ひて話杯をかゝり又日本
人も奇妙なる色の紙或は日本の烟草其外珍器珍物等を取
出して和蘭人よ遣り其代りよ和蘭人より名札或は巻烟
草其外夫よ附きたる道具等を日本人よ送り杯して實は其
親しき形勢を十年も二十年も交りたる人と聊も異なる摸
様を見へざりけり

右様の事よて一時斗も休息して茶を飲み烟草を吸ひたる
後蒸氣車を出すと云ふ相圖あり故第二時少く過ぎの頃
使節等頗る大悦の模様よて結構なる蒸氣車よ乗り海牙を

さして乗り出したり

蒸氣車よも問屋場よも和蘭と日本の幟を立たり

日本使節其外夫よ従へる役人の役名並姓名等左の如し

- 第一正使 竹内下野守
- 第二副使 松平石見守
- 第三組頭 柴田貞太郎
- 第四勘定 日高圭三郎
- 第五目付 京極能登守
- 第六徒目付 福田作太郎
- 第七調役 水品樂太郎